報　告　麻布大学雑誌　第19・20巻　2009年

「馬を治す道具たち」展の記録

A record of the exhibition "Medical equipments for horses" in 2009

高槻成紀

麻布大学獣医学部，動物応用科学科，野生動物学研究室，神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71

Seiki Takatsuki

Laboratory of Wildlife Ecology and Conservation, School of Veterinary Medicine, Azabu University,
1-17-71, Fuchinobe, Sagamihara, Kanagawa, 229-8501, Japan

Abstract: This is a record of the exhibition entitled "Medical equipments for horses" held from August 1st to October 25th, 2009 at Azabu University. This exhibition was based on the collection donated by Mr. K. Orisaka in January 2009, who graduated Azabu University in 1963. The collection includes various materials related to horses, particularly those made during Edo era, and is worthy in that it focuses medical equipments for horses during the era. Another value of this collection is that these materials were not only collected but analyzed well. Mr. Orisaka studied each material in detail such as the background and improvement history. Further, he considered the uniqueness and original inspiration of the people of Edo era despite the "sakoku" (close of the country) through the analyses of these materials. The process of the exhibition preparation and the results of the exhibition were recorded.

Key words: acupuncture, Edo era, horse bell, horse materials, medical equipment

2009年8月1日から10月末にかけて「馬を治す道具たち」展が開催された。筆者はその企画に携わったので，その意義や経緯などについて記録しておきたい。巻末には資料を添付した。

背　景

麻布大学は100年を越える歴史があり，その研究活動の遺産として，数々の資料が残されている。もっとも都心の麻布にあった大学は戦災によって消失したために，資料の中心的な部分が失われたことは悲劇として記憶されなければならない。筆者は2007年より本学に赴任したが，前の職場であった東京大学総合博物館は我が国の大学で質量ともに最も充実した資料を擁する博物館のひとつであった。それに比較すれば本学の資料は十分とはいえないが，しかし獣医学という点に限定すれば相当に価値ある資料が残されているとの印象を得た。ただし，その保管状態などはよいとはいえず，その改善が必要であると感じた。大学資源の収集と保管，整理，分析，展示などの活動は狭義の研究教育とともに大学のもつ重要な機能のひとつであり，それぞれの大学が社会的責務として充実させる必要がある。

折坂馬具コレクション

そのような状況の中で2009年1月3日に本学の卒業生である折坂金弘先生が長年収集された馬具を寄贈されることになった。学長らとともにその馬に立ち会い，そのコレクションのすばらしさに刮目した（図1）。

このコレクションは「折坂馬具コレクション」と呼ぶことにした。このコレクションにはいくつかの注目すべき特徴がある。

図1　資料を説明される折坂先生（左）と政岡学長（右）。2009年1月30日，本学にて。

ひとつは馬具全般に及ぶのではなく，とくに江戸時代の医療具に力を入れている点である。このことは折坂先生が本学の獣医学科を卒業生ならではのことであり，本学の資料にふさわしい。

もうひとつは，資料はただ収集されたのではなく，それぞれの収集品について徹底した情報収集と考察が加えられており，その多くはすでに論文として公表されている点である。収集品は存在することだけでも大きな意義を有するが，その価値は専門的立場から説明されることで飛躍的に大きくなる。

さらに，これらの著作物を読んで認識したのは，折坂先生はこれらの資料を解析することを通じて，江戸時代という時代そのものの精神を解き明かすという高度な学問的営為を行われているということである。すなわち，一般には江戸時代は鎖国によって海外との文化交流を拒絶し，暗黒の時代であったかの解釈がなされるが，馬具をみると，むしろきわめて独創的であったということを指摘しておられる。もちろん，芸術や建築など，一般に注目され，資料も多く残されたものを通じての江戸論は多い。しかし専門の獣医学を活かし，馬具という目立たないもの，情報の残りにくいものに着目し，私財を用いて収集し，その内容を該博な知識によって解析されたことはまことに得難いことであるといえよう。

私はこれらのコレクションをなんらかの形で展示する必要があると考えた。

展示へ向けて

そこで学術情報センターを中心に計画を作り，予算申請をしたところ，7月8日になってこれが採択されたという朗報が届いた。8月上旬にオープンキャンパスがあるので，できればそれに合わせて展示をおこなうのが望ましいと考えた。しかし時間がないので，すべての作業を大至急進めなければならなかった。

私は連絡を受けたその日のうちに資料の全貌を思い浮かべ，展示の概略をデザインした。そして，折坂先生に，展示が実現することになったことを報せる手紙を書いた。翌日には挨拶文と折坂コレクションの意義を成文化した（資料1，2）。そして代表的な資料を撮影して，ポスターのために備えた。挨拶文とポスターは日本の伝統的な資料をイメージさせるために黒地に白と灰色を基調とし，無彩色の中に資料が浮かび上がるものとした（資料1，2）。

これらの作業と並行して，折坂論文を読み直した。そしてその価値を再認識した。しかし，いくつかの部分で腑に落ちない点，理解しづらい点があったので，折坂先生にお電話して解決した。なお折坂先生は私の手紙が届いた日にお電話くださり，展示のことをよろこんでおられた。馬具のことになると，熱っぽく語られることが電話を通して感じられた。また7月18日には私の質問についてのお返事を手紙でいただいた。

その後，東大時代にお世話になった業者に連絡をとり，概略を説明して，展示作業に入ってもらった。私は展示品を選び，キャプション原稿を作成した。

7月22日には業者が来学した。そして，展示品を配列する背景の「壁」の色は思い切って赤色にしたいがどうかと聞かれた。私は，展示コーナーは背景が白であるので，薄い色ではプレーンな感じになるので，濃色がよいと思っていたが，黒褐色か濃紺色を想定していた。赤色は私の想定とは違ったが，提

図2　展示準備作業をする業者（7月31日）

図3　展示全貌

示された赤色はやや朱がかかっており，江戸時代を連想させるものがあった。学術展示としては型破りの派手な色であるかもしれないが，思い切って採用することにした。

折坂論文を参考にすれば，長めの解説を書くことは不可能ではなかった。しかし東大時代の経験から，長い解説文は来訪者にはほとんど読まれないことを知っていたので，展示物を主人公とし，説明は最小限にして，キャプションに入れ込むことにした。

展示は1）挨拶文や折坂先生を紹介する導入部，2）馬の体に載せた「虻除け」という布，3）ハイライトである馬針などの医療具，4）馬鈴などとし，これに本学らしさを付加する意味で5）馬の頭骨と足の骨格標本という5つのコーナーで構成するものとし，1）から4）までを赤地の背景に，5）だけは白地として，異質感を持たせた。

これらのことを業者と打ち合わせて決め，発注し，そのあとはポスター作り，パンフレット作り，アンケート用紙（資料3），その台作りなどをした。これについては学術情報センターの高橋徹事務長と尾崎聖太郎氏にご尽力いただいた。

7月31日は業者が準備した台やキャプションを持参し，暑い中で一日中かかって展示作業をしてもらった（図2，3）。

展示内容

1）導入コーナー

折坂先生が来学された際に撮影していた学長との歓談の写真が役にたち，先生の紹介にふさわしいものとなった（図4）。このコーナーにはコレクションのひとつである浮世絵も掲示した。これは歌川広重の「池鯉鮒（ちりゅう）」，現在の知立市の景色で，馬市が立つの

図4　導入コーナー

で有名だった場所である。こうした景観も，当時は馬のために茅場が維持されていたことなどを読み取るのに有効であることを知らされた。ひとつのものに徹底すれば，同じものを見ても「読解力」が違うことの好例だと思う。

2）「虻除け」コーナー

「虻除け」は馬の背を被う布であるが，このコーナーはこれらの布が面積をとるために2点しか展示できなかった（図5）。丸に吉の字のデザインは沓切鎌

図5　「虻除け」コーナー

（後述）を入れるケースにもお揃いのものがあり，博労が自分の馬を統一的なデザインで飾ろうとしていたことがわかる。現代の自動車好きが，自動車に装飾する心理と通じるものがあろう。

3）医療具コーナー

医療具のコーナーはこのコレクションの中心である。針は瀉血のためのものであるが，驚くのは，家畜の医療具でありながら，実にみごとな装飾がしてあることで，ことに肥後馬針の柄の部分の象嵌の意匠と技術は目を見張るものがある（図6）。ここには江戸の刀師の技術が存分に活かされている。

図6　肥後馬針

そのほか，広義の医療具としていくつかの展示品があった。鬣（たてがみ）を切るためのはさみは，おそらく現存する唯一のものであろうということである（図7）。また蹄を切る刀は造形的に魅力的なものであったが，折坂先生はこれは畳を切る刀にアイデアを得たのではないかと推察しておられる（図7）。また，沓切鎌は円形の木の根付け，今でいうストラップとひもでつないであり，博労がこれを腰の帯につけてかっこよさを競ったものと思われる（図7）。

図7　医療具コーナー

展示はしなかったが，折坂先生は江戸の馬の医療管理において，「講」という組織によって安価に馬の健康状態を診断するシステムが構築されていることを考察しておられる。病気になってからではなく，事前に診断をして，予防をするという現代医学の鉄則のひとつを，江戸の無学な博労が実行していたということは注目に値するであろう。

4）馬鈴コーナー

馬鈴コーナーにはいくつかの馬鈴を紹介した。折坂先生が評価しておられるのは，世界中の家畜の鈴はいわゆるベル，つまり末広がりの金属器や木器，あるいは球形の下部に開きのあるものであるが，江戸時代の日本のものは基本的にリング（輪）を組み合わせて音を出すものだったという点である。これについては文献的なうらづけもある。これは産地の地名から「大曽根」と呼ばれているとのことである。そのほか球形の鈴なども紹介した（図8）。

5）馬の生物学コーナー

生物学的な意味での馬コーナーではエオヒップス以来の馬の進化を紹介するプレートを作り，馬の頭骨と下顎骨の一部を切開して歯根部を露出させたもの，5本の指が進化の結果1本になったウマの足の骨格を展示した。これらには豊富な本学の哺乳類標本の存在を暗示する意味ももたせた。

これら5つのコーナーは備え付けの展示ケースに収めたわけだが，この展示ケースは実際に展示をする上では不備な点がある。たとえば下面は下部から

図8　馬鈴コーナー

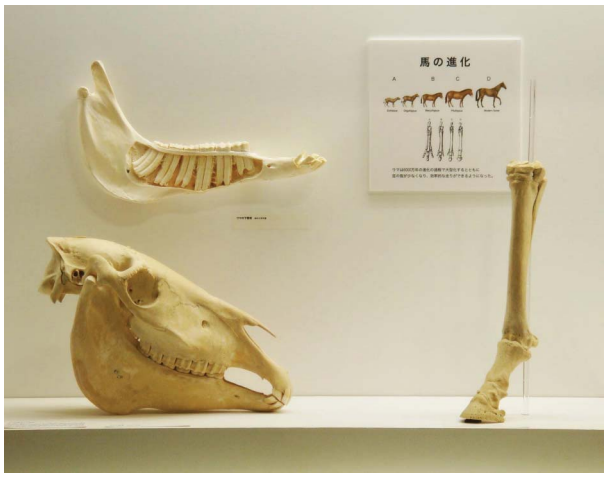

図9　馬の生物学コーナー

照明ができるように厚い磨りガラスがおいてあるが，その素材のために重い展示物をおくことができない。また照明はライトに位置が固定的であるために，展示物に応じたライティングの可塑性がない。今回の展示でいえば，たとえば肥後馬針にスポットライトを当てるなどの効果を狙えば，さらに魅力的な展示になったのであるが，それはかなわなかった。ただし，業者からライトの光質によって展示物の劣化（褪色）が起きるとのアドバイスを得たので，ライトを取り替えた。

オープンキャンパス

筆者は8月1日から調査のため海外出張があったために8月1，2日のオープンキャンパスには立ち会えなかった。関係者の話ではおおむね好評であったらしい。そのことはアンケート結果に反映されている。その一部をとりあげると，内容は量的にも質的にも適切であり，興味深かったという意見が多数を占めた（資料4）。個別の意見では，こういうコレクションがあることを知らなかったのでたいへん興味をもったというものが多く，中には江戸時代のものがよい保存状態であることに驚いたとか，タイトルがおもしろかったなどという意見もあった。おそらく獣医学とは病理あるいは解剖学といったイメージをもつ高校生や一般人にとって，麻布大学で江戸時代の馬具コレクションが展示されていたというのは意外であったものと察せられる。しかしその意外感は否定的なものではなく，むしろ非常に好意的であった。それはこうしたコレクションが狭義の生物学を越えて，人と家畜との関係を知る入り口のひとつであるということが理解されたことを意味していると思う。そして，そのような活動が自然科学的なアプローチとともに，すぐれて文化的なものであることを感じ取ってもらえたからであろうと思う。

資料収集の必要性と緊急性

展示が終われば，展示資料は収蔵管理されることになる。しかし現状の管理体制は十分とはいえない。きわめて価値の高い資料であるだけに，大学はしっかりした収蔵をする責任がある。またそうすることによってはじめて，卒業生からの資料の提供の受け入れが可能になる。東京大学総合研究博物館はもともと充実した標本をもつが，よい受け入れ体勢を整えて各層からの寄贈を受け入れてきたために，10年ほどのあいだにさらに資料が充実した。また東京農業大学の「食と農」の博物館も同様の方針により，卒業生からの寄贈によって資料が充実したと聞く。

現在は本学卒業生が高齢化し，物故者も増加しつつある。遺族にとっては故人のコレクションの意義は評価できず，そのまま眠るか放棄されることが多い。その意味でも，よい収集をすることは急がれなければならないことも指摘しておきたい。

結　語

限られた予算と，きわめて限られた時間のなかで，突貫工事で完成させた展示であった。私としては折坂馬具コレクションの価値は十分認識していたつもりなので，この程度の展示では満足していただけないのではないかという多少の危惧はあった。しかし8月3日に展示を見にご夫婦でお越しになった先生はたいへんに満足しておられたと伺い，安堵したことであった。この一事で，結果的には成功であったといえるだろう。これはひとえに折坂先生のコレクションの質の高さによるものであるが，しかし同時にこれをただ受け取って収蔵庫に眠らせるのではなく，展示してこそ価値が生きることを理解していただいた，政岡学長，有嶋学部長をはじめとする本学の教職員，とくに学術情報センター各位のおかげである。このような展示をもっと実施してほしいという声はアンケートにも多く寄せられた。本学にはこれにま

さるとも劣らぬコレクションがあり，それらも展示によって命を甦らせる必要がある。このような展示活動は，大学が社会的存在であるという意味で，市民にとって重要なものであり，そうした活動を通じて大学が社会的意義を高めてゆく必要がある。今回の「馬を治す道具たち」展がそのような将来の展示の起爆剤になればさいわいである。

資料1

馬を治す道具たち

折坂馬具コレクション展

2009年8月1日から10月23日まで
麻布大学獣医学部棟

ごあいさつ

馬は現代社会においては競馬で知る程度の存在でしかない。しかし自動車のなかった時代、人間社会における馬の存在はきわめて大きかった。20世紀前半までは騎馬は軍事力の大きな要素であったし、農民にとってトラクターであり、自動車であり、さらにトラックでもブルドーザーでもあった。そもそも麻布大学は馬学に取り組むためにできた研究教育組織から出発したのであった。

江戸時代までさかのぼれば馬の存在はさらに大きくなり、運搬や伝達の手段としても人間社会に欠かすことができない存在であった。馬に限らず家畜を飼育する上ではさまざまな問題も生じる。病気になることもあれば、負傷することもある。同時に人との交流もあり、深い絆が結ばれていた。

本学の卒業生である折坂金弘先生は本業のかたわら、こうした近世・近代の馬と人間社会とのかかわりに興味をもち、それを馬具に見いだすというユニークな姿勢で馬具の収集に努められた。ことに馬の医療に関する道具については我が国でも類例のない貴重な収集品がある。折坂先生は2009年1月30日（金）に、これらの貴重な収集品をまとめて母校に寄贈され、本学はこれを「折坂馬具コレクション」として末永く保管することとした。

この寄贈を機に、オープンキャンパスに合わせて展示を行うことになった。折坂馬具コレクションの貴重な品々を見て、往時の人間社会と馬との密接な関係に思いを馳せていただければ幸いである。

貴重なコレクションを寄贈いただいた折坂先生にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2009年8月　麻布大学長　政岡俊夫

肥後馬針

鉄製の馬鈴

麻布大学獣医資料館設立準備委員会・麻布大学附属学術情報センター

資料２

折坂馬具コレクションの意義

馬具のコレクションは少なくなく、折坂馬具コレクションは数の点において特別なものとはいえない。しかし、その焦点を馬の医療に関する道具に定めたことにより、鍼などについては第一級のコレクションとなっている。馬具は庶民から武士までに共通の需要があり、つねによい道具が求められた。たとえば馬の病気の治療には迷信の要素もあったものの、すぐれて現実的なものであったがゆえに非合理なものは排除され、合理的なものが選抜されてきた。それだけではなく、日本刀作りの最高度の技術が用いられたし、意匠を統一するといった粋な美的感覚が反映されてもいた。沓切鎌とその根付を見るとき、馬方が「かっこよさ」を競ったようすを想像することができる。

折坂先生は、馬具をそうした多面的な要素が投影された物として、関連情報を含め深く追求された。こうした論考はすでに多数の論文として公表されている。そうして馬具を通して、江戸時代という日本史における特異な時代を眺め直し、鎖国によって海外からの情報が閉ざされた時代でありながら、決して「暗黒の時代」ではなく、むしろ独創性に満ちた時代であったことを看破している。このことは欧米の情報をコピーし続ける現代の我が国の風潮に対する警鐘ともなっている。折坂馬具コレクションはこうした点においてきわめて質が高いということができる。

左上 馬針, 上右　肥後馬針の刃先, 左中 肥後馬針のつか部, 下左 毛刈はさみ, 下中 鉄鈴, 下右 沓切鎌

資料3　アンケート用紙
「馬を治す道具たち」展　アンケート
訪問年月日　2009年　　月　　日

所属など
（高校生，その父兄，本学卒業生，本学学生，本学教員，本学職員，他大学学生，他組織の研究者，その他：　　）

この展示の内容は
（たいへん興味深かった，ふつう，つまらなかった，
　その他：　　）

この展示の量は
（多すぎた，ちょうどよい，少なすぎた）

このような展示を
（もっと続けてほしい，どちらでもない，やめたほうがよい）

そのほか，印象に残ったこと，お気づきのことがあれば，ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。
　　麻布大学獣医資料館設立準備委員会・麻布大学附属学術情報センター

資料4　アンケートの結果
「そのほか，印象に残ったこと，お気づきのことがあれば，ご自由にお書きください」に対する回答（原文のまま）。

馬医療具・馬具について
とても種類が多く良かった。ウマをもっとやってほしいです。
馬の手術道具なんて初めて見たので，もっとほかのも見てみたいです。
盛岡出身なので，チャグチャグ馬子の「馬鈴」の意味がわかり嬉しくなりました。
実際どのように使うのかわかりやすく見たいので，馬に使用しているところが見てみたくなりました。
馬具など，江戸時代の貴重なものでたいへんめずらしかったです。展示の説明書きに，使用された年代等が示されていてもよかったと思います。
昔の馬に関する道具をもっとたくさん集めて，このような展示を続けていって下さい。
馬が好きなので，もっと馬に関しての展示をしてほしいと思います。
馬には興味があるので，もっと展示をしてほしい。
ブスッとさすのは馬がいたい！
ぜひ鈴の音も聞きたかったです。
「馬を治す道具」というタイトルにとてもひかれました。そのような視点でのコレクションがあることに驚きました。
大切な家畜を長生きさせようという努力がかの昔からあったんだなあ…と，納得ですがビックリしました。
針やつめ切りなどめずらしく，きょうみ深かったです。
馬の針治療があるとは驚きでした。ありがとうございました。

保存について
保存状態の素晴らしさ。
とてもきれいに残っていたのでビックリした。
保存状態が大変良かったです。
そのまま残っているのがすごいと思いました。
江戸時代から残っていることに感動しました！これからも保存を続けていって下さい！

歴史について
歴史に興味を持った。

獣医学に関する歴史は，資料を目にする機会が非常に少ないが，最先端を知るのも大事だが歴史に学ぶ事も多いと思う。
歴史的なものが見られて良かった。
歴史的な珍しい物が見られて良かったです。
知らなかった歴史について少し興味が出た。
展示について
もっと多くの人に触れるような形で公開してほしいと思いました。
Webにてのせていただけると（映像や音と一緒に）ゆっくり見れそうな感じがしました。
折坂コレクションまだあるなら続編を！　もうあまりなければ旧蔵品（70，80周年の記念品とか，鉄枕とか…）を加えて。
3か月に一度位で展示を代えて下さるとありがたい。
とても貴重なものが数多くあり，大変興味深かった。ぜひまた違う展示も見にきたい。
もっといろいろな展示物を増やして欲しい。獣医資料館を本学の学芸員課の養成に役立てては。
麻布大学は良い標本などがあるのに常に展示できていないのがもったいないと思います。常に展示できる場所を用意し，保存良く展示してほしいと思います。
その他
大変興味深い物を見せて頂きました。ありがとうございます。
凄いと思いました。
説明して下さったので，より良く理解できてよかった。
歴史的な説明をして頂きありがとうございました。
詳しく説明をしていただき大変興味深かった。
説明ありがとうございました。
初めて見たものが多かったので，とても勉強になりました。
今まであまり興味がなかったのですが馬に興味を持ちました。（獣医－馬医）ご丁寧な説明ありがとうございました。
見たことのないものばかりでおもしろかったです。
前の展示の方が良かった。

資料５　折坂金弘論文一覧

折坂金弘．2001．伯楽・馬医の治療用具について．馬の科学，38: 495-499.
折坂金弘．2002．江戸時代における伯楽の馬，牛への獣医外科療法とその用具についての考察．獣医畜産新報，55: 323-328.
折坂金弘．2002．エリカリ（たてがみ切り）と伯楽ばさみについて，獣医畜産新報，55: 781-784.
折坂金弘．2004．馬と文化，江戸時代の馬の疾病対策（上）民間と武家社会の施療法．ホースメイト，47: 41-44.
折坂金弘．2004．江戸時代の護蹄用具・装具について．獣医畜産新報，57: 69-75.
折坂金弘．2005．馬と文化，江戸時代の馬の疾病対策（中）日本の独創的な馬療法．ホースメイト，48: 47-50.
折坂金弘．2005．獣医用刺絡（瀉血）用具とその変遷．獣医畜産新報，58 : 77-381.
折坂金弘．2005．獣医用焼烙用具の変遷と治療補助用具．獣医畜産新報，58: 1041-1046.
折坂金弘．2005．日本における獣医職の名称推移と社会的地位・収入について，第60回日本獣医史学会研究発表会資料
折坂金弘．2006．江戸時代における日本の馬医療―独特な医療システムと独創的な療法・用具について，第62回日本獣医史学会研究発表会資料
折坂金弘．2006．馬と文化，江戸時代の馬の疾病対策（下）独創的な馬治療用具・装具．ホースメイト，49: 48-50.
折坂金弘．2006．獣医学資料の収集・保管・展示の必要性と緊急性．獣医畜産新報，59: 622.
折坂金弘．2007．馬事往来．馬鈴の研究．Hippophile，28: 1-7.（日本ウマ科学会）
折坂金弘．2008．馬事往来．馬上の猿信仰について．Hippophile，32: 5-9.（日本ウマ科学会）